

職 歴

業

昭和十七年七月二十日

鉄道省東京鉄道管理局池袋

駅退職

八月一日

第百生命徴兵保険相互会社

入社

昭和十九年二月一日

満州第七七部隊第一中隊

伊藤隊入隊

昭和二十三年八月十一日

引揚船「永徳丸」に乗船ナ

ホトカ港出帆

八月十四日

舞鶴港上陸復員

九月一日

第百生命徴兵保険相互会社

に復職

昭和二十五年二月四日

第百生命保険相互会社を退

社

二月十七日

東京都職員採用により北区

役所勤務

昭和二十八年三月

東洋大学短期大学部専攻経

済科卒業

昭和五十六年三月

東京都北区役所停年退職

復員後、東京都北区役所に勤務されながら、東洋大  
学短期大経済科を卒業され、豊富な知識と持ち前の優  
しさと地域社会に貢献され、現在も全抑協東京北区支  
部の役員として御協力をいただいています。

(東京都 広瀬 金四郎)

抑 留 記

富山県 村 澤 隆 司

作った米で餅がつけると楽しみにしていた。だが正  
月前に召集令状が来た。正月の餅が出立祝の餅になる  
うとは思ってもいなかった。今日も一日の農作業を終  
わって帰る団員が、遠くから歌って帰る。来年の今頃  
の運命も知らずに……。

あの山この谷勇ましく

血潮をながした兄弟よ

いまこそほえめきいてくれ

## 吾等のかちどき建設の歌

神利の山々も秋を迎え、黄葉した山を遠くから見ると美しい。自然にできている山ナン、山ブドウ。山仕事を終えて帰る私たちはブドウ、山ナシを取って食べる時のおいしいこと、甘酸っぱい味が腹の中にしみ通るようだった。

今の中国が青少年の農業教育に力を入れているから、私たちのいた頃の農業ではないであろう。私たちが学んだ北海道農法で建設した神利の村も若い中国の青少年たちの手で後をついでいてくれたら、こんな嬉しいことはないであろう。昭和二十（一九四五）年の正月が最後になり、長い義勇隊生活の最後の年でもあった。

今日も兵隊に入る人がいるので、祝酒会場を作り、書いた紙のぼりと、共同炊事で作られた料理が並べられる。酒は現地のパイチュウです。夜に入り祝酒会場は、さながらお祭のようです。パイチュウも回るにつれて一段と会場の声も大きくなり、あちこちで歌が出る。

戦雲暗く陽は落ちて

孤城に月の影悲し

誰が吹く笛かしらねども

今尚名残りの白虎隊

出征する人々の気持ちは、これが最後の御奉公と思っていたが、この敗戦までの僅かな軍隊生活が、長いシベリアの抑留の原因となり、あるいは永遠に帰ることのない客死の道につながっていようとは、誰が予想したであろう。

昭和二十年の元旦の朝は雲一つない晴天であり、白い雪の花が咲き、その美しいこと、松の葉をさして松が立てられた。本部では元旦の式典が開かれた。集まる団員の頭数が目に見えて少なく寂しい元旦であった。部落に帰って共同炊事からできたての雑煮を酒をと、一緒に飲んだり少ない団員と雑談しながら正月の気分を晴らした。

入営の通知を受け取る

ハルピンの兵事部より、ハルピン四三七〇部隊第一装甲列車隊に入隊せよと、私の所へ通知があった。岡

田君、橋本君、私と三人である。私たち三人は、入隊日の十四日前に団本部を出発することにし、三人一緒に三河屯まで権堂君に御者をお願いしてあったので本部前に集まった。お世話になった川原団長、近森先生、新堂先生、若林先生方に御礼の言葉を交わし、団友にも挨拶し、団本部に別れを告げる。苦しかったこと、楽しかったこと、思い出せば色々なことがあった。命があればまた来ることがあるだろう。足の遅い第二福（馬の名）を走りながら歩いたり、乗ったり、思い出を話しながら、三河屯を目指して行った。中河から三河屯まで山がたくさんあるので十三里の道もなかなか大変であり、三河屯に着いたのは九時頃だと思ふ。馬も人間も疲れて口をきくのも大変だった。朝鮮人の飲食店で夜食を兼ね権堂君の今日の苦労を感謝しながら酒で乾杯した。十二時を過ぎて馬と御者の宿を見つけ、そこで満人と一緒に泊まることにしたが、第二福が日本馬なので盗難にあうことを満人から知らされ、四人が交代で見張り番をしながら、満人と一緒に寝具もないアンペラの上でごろ寝をし寝れない一夜で

あったが、私には現在でも忘れることのできない入営前の三河屯の御者宿の一夜であった。

見張り番をしながらいろんなことが頭に浮かんでくる。小学校の頃、日の丸の旗を手に出征兵士を出町駅まで送りに出かけたこと、義勇軍に入るとき村の人がたくさん見送って下さったこと。内地であつたら今度は父母に立派な出立祝いをし、最後の一夜もあつたかい寝具の中で、夢でも見ている頃なのだがと思いにふけてみると、橋本君が来て「交代しよう」と、声をかけたので夢からさめた。自分の姿を見て情けなく思った。今までたくさんの団友たちが兵隊に入ったが、僕らのように馬そりで三河屯まで歩いて来て、満人の御者の宿に泊まっている兵隊があるだろうか。私もそんなことを思い出して、寝つけないので、酒でも飲むと寝られると思っていたが、なお寝られない。朝まで酒でも飲んで語り明かそうと言って三人で酒を飲むように、東の空が明るくなり、人と馬の動く音が音も遠くから聞こえる頃、三人で父母のところへ便り

を書くことにした。父母に、元気に兵隊に行ってきた  
すと便りを書き終わる頃、太陽は高く昇り、宿には満  
人が二、三人しかいなかった。朝食前に権堂君と乾杯  
をやり、お互いの健康と再会を約束して別れること  
にした。第二福号はきのうの疲れもなく、神利方に向  
かって走り去る馬そりを見送った。権堂君、さような  
ら、元気でな。

私たち三人は三河屯から汽車で五常に出ることにし  
た。昼頃に三河屯を出発して五常に着くと、駅前には  
マーチョがたくさん来ている。数回にわたって五常に  
来ているが、五常にも来ることはあるまい。会館で池  
田さんに会う。私も入営の通知の来たことを話すと、  
池田さんは、俺もいつ来るか分からない、と言った。  
父との親友であり、何かと力になっていただいでい  
た。饞別を下さり、ありがたくいただいた。会館での  
最後の宿をとり、三人で語り、酒を飲み、自分の人生  
を語り、朝の三時頃であった。

二十年三月十四日、ハルビン兵事部広場に、私たち  
と同じ若者がたくさん集まっていた。手続きも終わ

り、ほっと一息した頃、初年兵受け取りに各部隊の将  
校が来て、部隊ごとに集合させ、氏名と人員点検を  
し、私たち三人はここから一人一人になるのだ。無事  
でいたら日本で再会することもあるだろう。東に西に  
北に別れ走り去るのを、トラックに乗って見えなくな  
るまで手を振っていた。二十四年、復員して見ると、  
橋本文吉君だけが帰らぬ人となっていた。終戦十日前  
から戦闘に参加した人々は数万に達しているだろう。  
上口正三君、橋本文吉君らは消息不明として取り扱わ  
れている。

ハルビンの教会の鐘は鳴らず

僅かな軍隊生活と敗戦の中で、私にとって貴重な体  
験と教訓を学んだ。

昭和二十年三月十四日、ハルビンの第一装甲列車隊  
に入隊し、第一、第二装甲車に分かれ、部隊の作戦任  
務は、牡丹江<sup>ポダンコウ</sup>に出て、綏芬河<sup>スイフンガ</sup>に出て、ソ連に入るこ  
であった。私は歩兵中隊機関銃小隊に二カ月、作戦が  
変わり、満州と朝鮮の国境の上空防衛作戦となり、機  
関銃を下ろして高射砲となり、初年兵は高射砲とともに

に運命を共にした。ハルピンの繁華街は、国際人がたくさん見られる所で、満州人が一番多く、白系ロシア人もたくさんいるが大方軍人か開拓者ばかり。国際大使館がたくさんある。北の都ハルピンだなあ。義勇隊にいた頃、新京（長春）、奉天（瀋陽）を見たが、ハルピンが一番活気があるように思った。

星一つしかない軍服姿なので、きまりが悪いやら嬉しいやら。日本映画の、「かくて神風が吹く」を見て、日本映画の素晴らしさを感じ、レストランで軽く洋酒を飲んで営舎に帰ることにした。街はいつもと変わらぬ平和の街であり、数々の思い出を残してくれた。中央病院に入院したこと、軍隊に入ったのもハルピンであり、四角の石を並べた美しい道、チウリン街をゆっくり散歩する白系ロシア人、どこで突くのか教会の鐘の音、なんと平和な静かなハルピンだっただろう。

昭和二十年八月十五日、敗戦。一夜にして想像を絶する残虐行為が、敗戦を期して毎日のように続いた。中国とソ連の旗が高々と上がった。そのうちに満軍の暴動が起こり、そのため電気が止まり、水道が止ま

り、夜など一人歩けるものではなく、あちこちで銃声が鳴り、戦車の走る音、また若い日本の女性など満人家屋に押し込められ、鬼畜に等しい恥辱を加えられた。悪質な満人どもが集まって来て、日本人の財産のすべてが一日にして奪取された。日本人難民は学校や駅前等に集まって来ている。一方、北満から南下して来る開拓民の人たちと、ハルピンに在留している日本人が、一度にハルピン駅に集まったから大変である。

まさにこのことこそが生き地獄でなくてなんである。う。「兵隊さん何でもいいから食べる物と飲む物を下さい。」着の身着のまま逃げたのだから、足に何もつけていない難民がたくさんいた。部隊から食料をトラックに積んで行き、それを与えても水が出ない、米を炊くにも水が出ない。また、軍の乾パンも与えたが、水を飲んでいない人がたくさんいるのでどうすることもできない。

この時ほど、私は水が大切なものだと痛切に感じたことはなかった。

燃える物は何でも持ってきて燃やし、明かりの代わ

りにしているのです、駅前はまだで山火事のようにだつた。

このようにハルビン一帯は大混乱に陥ってしまつた。あの静かな平和な教会の鐘の音がどこへ消えていったのだろうか。そうした中で私たちの部隊が何度か朝鮮に下るべくハルビン駅近くまで出るのだが、北満から下ってくる列車がたくさん駅の中に止まって動かず、本線に入ることができず、無駄な時間と日々を送るしかなかつた。

そのうちにソ連の飛行機がハルビンの上空にたくさん来るようになり、ソ連の軍使が来たのは敗戦五日後だつたと思う。若い十五歳の兵隊と六十歳ほどの老兵の中に混じって軍使が、私たちの部隊に来て装甲列車の武装解除をする。残念なことに、一回の戦闘もせず、この上もない不名誉なことと思つていた。日本人の難民の中には、「百万の関東軍は何をしているか、日本本国破れても満州国がある、ソ連に武装解除するのだ、なにゆえ戦わないのだ。もし関東軍が解散したら、全満にいる日本人の生命は誰が守るのか。我々難

民に死ねと言うのか」、このような声があつちこち難民の間から聞かれることもあつた。関東軍は百万の軍がいたが、敗戦当時は南に軍が下り関東軍は二十万ほどで守つていたのである。

第四軍の本部より伝達があり、若い陸軍少佐だったが、どんなにか苦しい思いであつたろう。在満召集兵及び現役兵は自由行動を許す、近く部隊は阿城に集結する。諸君等の気持ちをまとめていくように、との話であつた。事実上の在満召集兵と現役兵の解散であつた。

阿城に行こうか、五常に行こうか、とにかくハルビンの開拓会館に行き、二、三日宿泊して考えることにした。この数日間ろくろく寝られない日が続き、毎日缶詰ばかり食べているせいか、体がだるくどうにもならない、早く熱い味噌汁でも飲みたい。今夜も外では満軍の焼き討ちで山火事のように火の玉が空高く舞い上がっている。銃器を持たないと知られると、いつ何時満軍の襲撃を受けるかもしれないのだ。これから先は自分で自分の身を守らねば誰も守ってくれる者はな

い。拳銃に弾を入れて、脱出計画は真剣そのものであった。ハルビン会館での一夜であった。

東の空がうっすらと明るくなる頃、私と友人二人で街を歩くことにした。ハルビンの市内は無警察そのもの、私たちは日本人でもない満人でもない服を着て歩き、いろんな話が飛び込んで来る。ソ連が全満州の重要施設を根こそぎ持ち帰った事。ベニヤ板から、電話機はもちろん、鶏、豚、アヒルから畳、麻布袋からペラペラの紙類まで、よくもこんなに欲の皮が突つ張つたものだと驚くばかり。あらゆる機動力を利用して、どンドンシベリア領に持つて行ったのである。敗戦とは武力戦の勝ち負けだけでなく、私有財産も何もかも一切が犠牲になるものだということをまざまざと体験させられた。

ソ連軍の通過した後は、草も生えないということはいく正真正銘事実である。よくも根気よく、それも短時間の間に、あの大きい豊満ダムの発電機から鞍山の製鉄工場、本溪湖及び宮ノ原の工場、オイル・セールの工場と、時価にしたら十兆億にも当たる財宝を奪い

去つたものである。「全貌」が書き残した記録である。個人の時計、万年筆、電灯の球、靴からスリッパまで、よく訓練された泥棒もこれには尻尾をまいて逃げ出したのである。その証拠には満人が我々より上手であり感心したと礼賛しているのであった。世界的に有名である満人がキモを潰したのであるから、さすがはスターリン式戦略の直系部隊と言えよう。

かくして風のごとく乱入して来た弱兵泥棒部隊は、戦々恐々として戦争は二の次、対独戦で失つた損害をカバーする意味も含めて、満州のすべての財宝をかってらつて逃げ去つたのである。だから、その後に来た中共、蒋介石両軍が残飯もない、みじめな生活をしなければならぬ事態になつてしまつたのである。

バイカル湖畔からイルクーツク地区の軍事工場を大々的に拡張し、シベリア沿線の満鉄のレール等々、通信施設は満州電々会社のストック品や関東軍の通信隊用品で立派に完備したことでも、いかに莫大な物資が搬出されたかがわかる。日本人の尊い血涙で築き上げた財産はもちろん、数十万の生命をも奪い去つたソ

連が、どんな顔をして平和だ、親善だ、国交回復だと言えたものであろうか（元中央銀行田口功）。

人々の話によると、牡丹江から朝鮮に出て羅津から日本に帰るのだとの話を聞いて、うそか、まことか、海の近くに出ることが本当だと思った。ハルビンの開拓会館を後にして阿城に行くことにした。来てみると日本人難民がたくさんいるではないか。老人、子供、関東軍兵士、軍馬など、無蓋車で南下しているらしい。二人で宿を探し歩き回った。開拓団の人々と一緒になり、牡丹江方面に行く話になり、無蓋車で旅立つことになった。横道河子のトンネルの中で日本人とも満人ともつかぬ死人の山、後戻りしてトンネルの上を歩いた。山また山を歩くこと一時間。すると、一組の一人がおり、よく見ると三、四人の女の子と男の姿である。「いずこに行きますか」、「牡丹江に行きます」「私たちが牡丹江に行くところですよ」。彼らは山から山へ歩いたとみえて、人々を避けているように思われた。横道河子を過ぎるころ夜になり、野営することに、水と砂糖を入れたカボチャの蒸し焼きにし、山

の中で友達になった人にも食べてもらった。たき火を囲んでいろんな話の中で、「私たちは開拓者で、突如ソ連との戦闘が始まり、命からがら山に入り野宿してきたのです」「私も義勇隊開拓団でハルビンの部隊に入り終戦になり、初年兵は解散となり、阿城から無蓋車で牡丹江に行くところですよ」「勃利の義勇隊訓練所に着いたが死人が山となっており実に陰惨な状況でした、ソ連軍との激戦で守備が死闘、全滅した後でした」と話していた。

その事が二十四年に帰ってからも思い出され、アメリカの有力誌「コリヤンズ」の十月号に「まぼろしの如く消えた開拓者の末路」を読んで、本当にあのとき話した、義勇隊の戦車のキャタピラーの話を、誰かが伝え、それを記事にしたのである。第五軍が戦闘をしたところである。

歩くこと二時間、広々とした野原に出た。あっちこっちむしろがかぶさっている。日本人であろう。南無阿弥陀仏、両手をあわせてその土地を立ち去ることにした。



私たちは海林で收容された。弾薬がたくさんあり、駅にとまっている無蓋車に積む仕事である。無用の物は穴に埋め、利用できる物はソ連に持ち帰る。二十万の日本人をいかに利用するか、私たちはソ連にうまく利用されたのである。弾薬を出した後はその中に收容された。一日の食料の配給は野積みにしてある。一日で配給が終わる。ソ連軍がトラックで毎日輸送するので、それが一カ月も続いた頃、牡丹江の收容所に移され、陸軍の兵舎の跡であり、運ぶ食料を取りに行くだけである。朝鮮、羅津ワシンから日本に帰るものだと思うていたから、そんなに苦にならなかった。

十月に入り、朝夕涼しくなり、鈴虫が鳴く頃となり、山々の色もうっすらと色がついてきた。私たちは野菜、味噌を買い付けに行くことになり、町に出かけることになった。私は味噌の買い付けに行くことになり、味噌工場に着くと、屋根が爆撃でおち、穴を掘って味噌を取り出して来たこともあった。野菜買い出しに出かけた将校が帰って来ない。何かがあったのだから。

海林の收容所でいつの間にもやら男女を別々に分けるし、若い者と老人も分け、そうしているうちに輸送用の有蓋車に寝台代わりの棚を作り、ストーブを据え、薪を積む。また冬の満服もたくさん積み込んだのだ。朝鮮、羅津から船で日本に帰ることはないであろう。私たちは不安でならない。するとウラジオ港より帰る話を持ち上がっていた。私は冬の満服が気にかかる、ウラジオ港までそんなに時間がかからない。その時は皆が、荷物の整理などして、家に帰ったらゆっくり休みたい、家族は元気に帰ったろうかなどと話し、皆が日本に帰ることを疑わなかった。

人のうわさもどこまで本当であらうか。綏芬河に二度と来ることもないだろう、日本に帰るのだと信じていた。ウォシロフより右に行けばウラジオ、左に行けばハバロフスク、私たちの乗った輸送車は昼は走らず夜になると走り出す。朝まで走りどおし、朝になって太陽の出る方を見ると反対に昇っている。大学出の兵隊が、ハバロフスクに走っていると聞いた事が当たり、若い将校が訓示した。自分たちはウラジオ港から

日本に帰るものと考えたが、ハバロフスクという所で、しばらく作業に従事することになった。おそらく港が結氷して船が入れないためと思う。冬の使役ですから春まで頑張ってください。私たちの内部で何かがプツンと音をたてて切れた。失望、だまされた、という感じ。悲しさと怒り、早急に日本の土を踏めないという精神的打撃。私たちはたちまち体力、気力もなくなるのではないかと思った。

私はシベリアに輸送されたのは昭和二十四年十二月初旬、雪に閉ざされた山と森の真ただ中に、半ば壊れかかった丸太造りの大きな建物があり、後で知ったことだが、帝政ロシア時代の国事犯としてシベリア流刑された所であり建物でもあると知った。私たちもそのようなところに置かれるのかと思うと暗然とした。

いかに物資がないと言いながら満服まで持って行かなくともよいではないかと皆が立腹した。だがそれが皮肉にも私たちが満服を着ることになった。大日本帝國軍人が満服など着れるかと怒ってみても、シベリアの寒さと冷たさには勝てず、袷々満服をつけ寒さをし

のいだ。

無電塔の山に登ると、山と森であった。小さな町があり倉庫のような建物に仮眠した。夜半に自動車の音、目が覚めた。これからはトラックで輸送されるのだ。うわさでは、どこか山の中へでも行くのだろう。四十人ずつトラックに乗せられ、頭からすっぽり防寒用シートで覆われた。風を切って疾走する。車上の寒さ、冷たさ、二時間余りするとトラックが停車した、収容所である。丸太作りの建物が七つほどあるだけ、後は山と森だけ。毎日の作業が収容所の構築であった。ソ連兵の銃剣の下で動くことほど自由という言葉の身にしてみたことはなかった。

収容所に帰ると正門でソ連兵がアジン、ドヴァ、トリー（一、二、三）と犬か馬を数えるかのように数え、中に入って来る。部屋の壁に万国赤十字条約による捕虜軍人の守則が掲示されている。これを見て、私たちは捕虜なんだという気になった。今日は何日だろう、今は何時だろう、毎日のように友に聞きだしている。日曜日は休みなので日数が分からなくとも、休み

の日だけは知っている。ある日、日曜日でもないのに作業が休みになった。何で休みになったか誰も知らない。昼近くになって誰かが「思い出したぞ、今日はなんと昭和二十一年の正月の元旦、餅が食いたいな、お前の郷里じゃどうやって餅を食べるんだ？」「小豆を煮てつきたての餅にまぶして食べるんだ、うめえぞ」「ポタモチはもち米を炊いて握ってアニコをまぶして……」「それはオハギだ、ポタモチは名のとおり餅にアニコを丸めてあるのだ」「違う違う、オハギとポタモチは区別するんだ」「さらしあんがオハギで粒あんがポタモチだ、知ったかぶりをするな」。食い物談義になると皆眼をランランと光らせた。空腹に生つばを飲み込みながら、憑かれたように異常に興奮するのだ。誰かが中を割って、「春のお彼岸に仏さんに供えるのが牡丹の餅で、略すとポタモチ、秋のお彼岸が萩の餅で略すとオハギだ、よく覚えとけ」と、言った。私たちは春には日本に帰還して、二十二年の正月は腹いっぱい餅を食うことができるだろうと希望を持ってはみたものの、捕虜の現実に戻ってしまい、生つばを

飲み込んで送る二十一年の正月であった。

そのような希望のない犬か馬のような捕虜生活が続くと、誰しも色々なことを考えるようになる。この私もそうであり、皆も口には出さねど腹の中で抑えていたことであろう。

ソ連の極東地方の地理を幾らか知っている者は、夜遅くなってから秘密会議を開き、脱走計画をする人たちも出てくるようになった。その人たちの顔は真剣そのものだ。「有志は作業用の斧を秘匿しておくこと、隙をうかがってソ連護衛兵の宿舎を襲撃、銃器を入手して收容所の外に脱出したら少数に分散遁走すること。トラックもしくは馬を奪い国境を突破して満州から朝鮮へ出る。そのため各班の編成に自動車あるいは機械化砲兵出身の車両運転手を入れておくこと」「いや間宮海峡は冬季に結氷するというからニコライエフスクより氷上を横断し樺太、北海道へ着くようにしたらどうか」「朝鮮と日本内地、樺太と北海道どちらも海を渡らねばならん、船舶工兵出身を加えるべきだ」。このように、毎晩のように営舎の中で秘密会議に口角

泡を飛ばして計画に熱中している時にのみ生き甲斐と希望らしきものを感じるのであろう。

正月も過ぎ、シベリアにも春が訪れた頃、皆の気持ちを大きくゆさぶる大事件が起こった。三人の脱走兵が出たのである。私は、このようなことになるのは当然だと思い、勇気を出して脱走したら無事日本にたどり着くように祈った。あれから半月もたった頃、ソ連の将校が通訳を連れて来て我々を集合させ「脱走者三人のうち一人は射殺、二人を捕らえた。だから脱走しても無駄だ、ただ刑が重くなる。日本に帰ることでなくなったらどうするのかヤボンスキー（日本人）」と言った。彼らが帰った後、隊長が「捕らえた二人をなぜ我々の前に連れて来ないのだ、そこがソ連側の手かもしれない。脱走者には無事逃げ延びてくれることを祈る、また後に残った者のことを考えて脱走計画など自重して下さい」と言った。秘密会議がだんだんなくなり、毎夜の話し声も聞こえない、なんとなく寂しい感じであった。

軍隊で炊事場といえ、兵隊にとって鬼門のひとつ

だった。炊事班長はたいがい部隊で最古参の曹長が軍曹、それに従うモサクレが揃っていたものだ。「炊事ご苦労さまであります、第三営舎めし上げにまいりました」と、かつての習慣どおりの挨拶すると、なんとも面目ないからか、炊事のモサクレは照れていた。しかし実際その頃は炊事係は苦労なことであった。急造の炊事場は丸太小屋でれんがを積んだだけで、かまどに五右衛門風呂のような底の深い鉄の大釜が五、六個据えてあるだけだった。第一水がない。森に小川があつて、流れが凍結しているのをツルハンで砕いてその氷を釜でとく。雑穀を煮る、米を炊くのと違って時間も手数もかかる。前記の献立によると食事を作るだけで精いっぱいというところだ。その穀物類もソ連軍が満州で捕虜用に押収してきたものである。コウリヤン、アワ、大豆、ソラマメから馬糧にする食料まで支給されたこともあった。

一度ソ連側の主計が梅干しをたくさん倉庫から受領して来た。通訳の話によると、梅干しという言葉がなかなかソ連人に分からず困ったという。ソ連人は、梅

干しのように赤い色の食べ物に余り好まない。食べてみると塩のようだからいだけなので、塩の代わりに梅干しを受領して来たとのことであった。食べる物なら何でもかんでも満州から持ってきたものと思う。まったく飢えとは悲しいものである。

炊事場でしばしば事故があった。食いたい、満腹したいの一念に取りつかれた兵隊が、つい悪事をやらかすのである。食事の合図で誰よりも早く炊事場に駆けつけ、「第六小隊めし上げにまいりました」とでたらめに他の隊の食事を受け取り、かくれて食べてしまう。後から本当の第六小隊の当番が来ても、めしがないのである。炊事係は慌てて犯人を捜し回らなければならぬ。シベリアの冬は夜が長いから朝食と夕食時は外が暗かった。その暗さに紛れて、他の当番が営舎にかついで戻る容器に後から飯盒を突っ込んで雑炊やスープをかつばらう不届き者もいる。「黒パン泥棒だ、捕まえてくれ」と、炊事係が叫び当番が追いかける。兵隊が各営舎から飛び出して来る。犯人を捕まえたが、それを我がものにしようとした逃げ。どう逃げ

回ってみても、柵に囲まれた収容所のことだから必ず捕まるのに、黒パン小脇に走る者、追いかける者、雪の暗がり、さながらラグビーの試合のごとく入り乱れる、人間喜劇と呼ぶには悲しすぎる光景である。

寒いシベリアの地区にも春が訪れてきた。春が来れば結氷したウラジオも船が出るのではないだろうか。一筋のわらをつかむ思いでの希望を胸に抱いていた。四月も中頃になってソ連側より突然百人ほど転属するようになるとの事である。転属先は三里ほど奥地の八〇一分所であった。そこには私の知り合いの友がたくさんいる所なので、私は百人の中に入れていただいた。ほかの人は、海の方に転属するのなら早く日本に帰れるかもしれないと、奥地行の転属に反対する人がたくさんいた。私はその頃から、今頃になって転属だとか、シベリア鉄道の建設に日本人捕虜を充てるとか、色々噂が出ることをみると、一年や二年で日本に帰ることができないのではないだろうかと思いはじめた。いや私だけでなく半数に近い人たちが思っていたのではないだろうか。

ハルビンの第一装甲列車隊にいた戦友などが八〇一分所に入っていることがわかり、半年ぶりに会った。前にいた所は収容所だけしかなく、モシカは、民間人、ソ連の軍人、囚人、日本人のぞいて二千人。工場から機械工場一つ、パン工場一つ、それにモシカ駅と給水所が山の中腹に高く建っているだけ。民家の方では事務所一つあるが、軍部と事務所が共同であり、劇場と社交場を兼ねたクラブ一つ、四、五百頭入る馬舎が一つ、馬の病院が一つ、馬そり工場小さいが一つ、指物工場一つ。山腹にはコムソモリスクへ行く鉄道、その下が道が一本、その下が川が流れており、橋を渡ると私たちのいる日本人の捕虜収容所があり、小さな田舎町である。八〇一分所に来た時は、アメリカ製の自動車で満州から押収してきた満鉄のマーク入りのレールを運搬していた頃で、人の噂によると、大戦中ソ連がドイツ軍にモスクワ近くまで押されたとき、物資がなくなり、鉄道もレールもドイツ軍によって破壊されたので、コムソモリスクまでの鉄道レールを外して一時しのぎをしたとの話である。

この鉄道沿線には日本人捕虜が十万とも噂され、鉄道建設のため枕木の補給、家の建設、道の補修工事など、たくさんの日本人捕虜が必要であった。

また、テルマという所に、ソ連の五カ年計画の都つくりにもたくさんの日本人捕虜が参加していた。私も三年目の年にテルマに行ってきたことがある。テルマの生活は後に書くことにする。

八〇一分所に來ての作業は家の修理作業が主だった。そのうちに指物大工の手元をさせられ、馬そり工場の方が大工が足りなくなり、私とあと一人が行くことになる。工場内では大きなシラカバの木をふかすセイロがあり、ふかした木を前の部分を早く曲げ、曲げ終わった木を四角に削る作業であった。二本合わせてかじ屋さんが金具を取り付ける作業なので、工場は毎日のように馬の出入りが激しく、馬舎のおやじさん、囚人上がりやで毎日工場に来て遊んでいく。どこことなく大好きでした。年は四十歳ほどで中年のおじさん、なんとなく話しやすい、捕虜という差別もせず、愛嬌のよい人で、噂によると人のために食料の横流しで十五

年の刑を受け、五年で満期だとの事でした。日本だと重くて一年の刑ですむものを、ソ連では共同物資を個人の所有にした時は重い刑を受けねばならない。このおやじさんもモシカの町の所長からも信頼されていたので、一つの家を与えられ、馬舎の責任者としてのポストを与えられ、私が義勇隊にいた頃、馬との生活が五年もあったので、馬の件には自信があり、おやじさんに頼んでみた。おやじさんは一つ返事で、君らの隊長に話をしておくから待っていなさい。二、三日して隊長から馬舎勤務へ行くようにと話があり、そのときはとても嬉しく、いまだに忘れません。馬舎勤務一年余りの間、数々の思い出の話があり、私の捕虜生活中こんな楽しい日を送ったことはありません。

#### 馬と私

シベリアの冬は春が近くに来ると氷もとけて、何となく気持ちも浮き浮きしてくる。今日も二百頭いる馬に、若草を食べさせるために山に放すのである。馬に乗って二百頭の馬を三人で連れて行くのである。毎日の事であるから、どの馬が一番先かは分かっている。

山に着くと思いいいに山に入って行く。朝まで仲良く食べるのだよと言って帰ってくるのであるが、帰ってこない日もある。一夜を馬と一緒に朝までいることもある。馬肉を取り出し、切って鍋に入れて食べる時は一番楽しみの一つである。死んだ馬を火葬にするのだが、ソ連の監視兵が火を付けているのを確かめて帰るのを見て、馬の足手を切り取り、馬そりに乗せて帰る。そして雪の中に隠しておくのである。シベリアの冬は生か死か、食べていくため死んだ馬肉を切り取って食べる捕虜の悲しい知恵である。

春先でもまだ氷が張り馬肉を保存するにはもってこいである。京都の高橋君、高森君、杉本君、通訳の品川さん、私との五人で食べる肉のうまさ。馬の馬乳をしぼり、残ったのをパン工場に持って行きパンと馬乳を交換してきたものだ。二十一歳は食い盛り、腹を痛めた事はなかった。燕麦を鉄板でいり、それを鉄の切れ端でつく。トタンの中ほどに穴をあけ燕麦をふるいにかけて、水でこねて鉄板で焼く。それがまたうまいこと。私の捕虜生活中、食べることは事欠かず、病氣

一つすることなく過ごしたのも馬のおかげだと思ふ。

そうしたある日、エンジンがたくさん貨車で送られてきた。夜になるのを待って三人で遠回りして貨車に近づき、下にもぐって待つこと数分、トラックが来てエンジンを積み込むのだ。ソ連の兵隊があかりをかざしている。トラックと貨車が五センチほどすき間があき、そこからエンジンがこぼれてくる、それを袋に入れる。見つかったら大変、兵隊は銃を持って立っている。見つかることもなく袋をかついで帰ることができた。食べることは命がけだった。二十一歳の思い出の一つである。

ソ連ではエンジンはなかなか手に入らない品である。私たちの口にはなかなか入らないエンジンであり、子供の頃エンジンは余り好まず、シベリアに来て食べるようになった。人間はたくさん品物があると、こうでもない、ああでもないで、品物がないとそんなことも言っておれない。命かけて取ってきたエンジンは、皆と一緒に食べ、特においしく感じたのである。

秋の風が吹く頃、乾いている大地のあちこちで山火

事の起きる頃、山火が発生し、全員駆り出された。数人残して火事場に入った。木の葉のついた物でたき、火を消し終わり、一休みしてから収容所に帰るのであるが、皆足元が暗いので何か歩きにくいようである。私は思った、鳥目ではないだろうか、私が先導して収容所まで無事帰ることができた。ビタミンA不足で、夜目が見えなくなる病気であり、松の葉を取って来て湯茶を作り、毎日飲むことになった。私は馬舎で馬の肉を食べている。おかげで鳥目にならず元気で捕虜生活を送った事を心からありがたく思った。

朝早く五時に起き、八時に仕事に出るの間に合うように馬に乗って迎えに行く。山に向かって三十分、この馬がいると最後だなという馬が下り始めると右と左と他の馬が出て来る。先導馬が動きだし、馬舎に帰ると七時半、やれやれ一日の仕事が終わって朝食にありつけた。

昭和二十二年五月、二回目の転属の話があり、百二、三十人であったと思う、五里ほど奥地の収容所で、仕事の内容は山から木を出して来る仕事だった。



私たちと同様に満州から運ばれてきた関東軍の軍馬が、首をふりふりなだらかな山路をゆっくりたどった。鞍傷の跡がみにくく浮いている老馬で、平常外される予備馬である。

濡れた子馬のたてがみを

撫でりゃ両手に朝の露

何気なく歌いかけて私はやめた。日本の馬は軍馬となり大陸へ出征し、今は捕虜の兵士と共にシベリアで使役に服している。人間には「ダモイ(婦国)」であっても、この馬には故国の土を踏むことはあるまいと思うと哀れでもある。私の勤務する馬舎には日本馬五頭、満馬五十頭、病気になった馬が三頭、いずれ三頭も交換されるであろう。

秋から来年の春頃まで氷結している間、山の伐採が一番忙しい時節なので、よその分所にたくさん出て行き、春になるとまた戻って来るのである。春になると草の芽が始める頃、病気の馬を残して全部夕方から翌日六時頃まで放牧する。私は足のかかとの方が凍傷にあり、二カ月間仕事らしい仕事もなく、馬の食糧倉

庫の整とんをしたり馬の金具の整理をしたり、そのうちだんだん回復し、六月の草花が美しく咲く頃となった。

六月頃また三回目の転属話があり、行く所はテルマから三里入った所であり、馬の草の切り場で、十月の中頃で終わることになっていた。船で上って行くのである。道らしき道はどこにもない、大きな川があるだけ。半年この地で草との戦いである。来る日も来る日も草々である。仕事の合間に白樺の皮を取りに出かける。ほかの友は大きな木を倒し四メートルに切り、舟を作る。タボルで中ほどを切り抜く、二人入るほどである。ほかの友はヤス作り、仕事の合間をみて作るので一カ月もかかる。七月頃、雨が毎日降り川の水がだんだん増えてきた。赤いどろどろした水が見る見るうちに増えてくる。避難しなければならず、近くに山がないので、一里離れた所に避難した。持ってきたテントで屋根を作り一時まに合った。二日間林の中で水がひくのを待っていた。その間、白樺の皮むしりばかり。水が少なくなったので帰ってみると、手も足もつ

けられぬ有様。後片づけが大変であった。八月に入つて舟ができた。ヤスもでき、白樺の皮も沢山でき、舟を出すことにした。夜が待ち遠しい。いよいよ舟が川に入る時が来た。白樺の皮に火がつき、川面が明るくなる、胸がときめく。まだかまだか。水面が明るくなる。鮭が水面に頭を出すところをヤスが動く。見事ヤスは腹を刺していた。十二時頃まで、七匹、今日は大漁だ。待っている友は火を燃やして待っているのだ。皆で焼いて食べる時の嬉しき、一日の草刈りも忘れて楽しい一時である。

無事草刈りも終わり、テルマに帰ることになった。ソ連の五カ年都市づくりも建設が進み、日本人捕虜たちの建設に対する心構えがよく出ている。日本人が帰っても、いつまでも日本捕虜が作ったのだと見られる。建設に励む日本人。転属転属で五回目になる。モシカの手前に転属になり、分所に入って何かと違う事に気がついた。

収容所の空気が一変したような思いがした。シベリア民主運動サークル、日本新聞サークル、集団主義で

勤勉な反面、権力に弱い、それが日本人の民族的特性なんだ。何か命令されても言い争うことがまずない。私は日本人から「はい」「そうですか」の返事以外聞いたことがない。そんな特性は、収容所の管理、捕虜の政治教育に大変役立つようである。私も帰国して労働者の国を作ろうと張り切っていた。日本大衆は飢餓にあえぎ、明日にも革命起こるかのように思い込んでいたのだ。

異常な集団心理の中で、日本新聞の情報操作に乗せられていたらしい。捕虜の多くが、天皇島に敵前上陸だ、赤旗を振り、集団で日本共産党に入党だと言っていた。勇ましい青年もいた。

赤いダイコンも中身は白いということわざもある。

囚人も色々あり、日本人に好意を持つ人もあり、好意を持たない人もある。私たちは色々話をするうち、燕麦のこと、馬乳のこと、綿に火をつけることなど、囚人に教わったのである。帝政ロシア時代国事犯としてシベリアに流刑され、重い刑のために脱走を計画する。冬服の綿を取り出し手の平でこすると、きな臭く

なり、手で半分にはぐすと火が燃えはじめた。脱走する時に用いたそうである。政治の話になると小さな声で共産主義はあまり好感が持てないと話をした。

ここでは、シベリア鉄道から、三十メートルの所に穴を掘り、地下三、四メートル掘り鉄パイプを埋める作業である。地下四メートルを掘るのが大変な仕事である。毎日毎日掘ることが仕事なのだ。誰かが叫んでいる、本部からの伝達らしい。ダモイダモイ、帰る帰る、日本に帰ることになった。パンザイバンザイ、七月十日列車で帰国することに決まった。そのときの嬉しさ、口にあらわせないのである。将校、憲兵、警察、通訳、この人たちは知らないうちにはいないのである。話によると、ハバロフスクの収容所に移ったらしい。帰る者と帰れない者、品川さんもないのである。元関東軍幹部や特務機関員ら二千五百人が取り残されてしまった。収容所生活十年、長い間抑留されたのである。旧満州、樺太などからシベリアに連行された日本人は、民間人を含めて六十万九千七百人、今日もなおその正確な数はわからない。捕虜収容所は約千

二百カ所。東はカムチャツカ、西はトニール川の流域、北はハミル高原の地、西麓という極寒の地で、飢えと重労働の日々、望郷の思いを抱いたまま果てた人々の数は一割を超える七万人以上と思われる。

日本人捕虜の輸送は、昭和二十四年帰国を完了すべし。私たちが確認し得た限りだが、抑留者の帰国について、これほど明瞭な発表を報じた日本新聞はない。

昭和二十四年七月十日十時、ナホトカ港を目ざして輸送車は動き始めた。シベリアの寒風の中でよく持ちこたえたものだと思っている。列車はいつもより速く走るのだが、なんだか遅く感じる。ナホトカの港に着いたのは夕方、雨の中、海岸で一夜を明かした。収容所は満杯で海岸で皆と一緒に待つことにした。朝から晴天である。海岸を見ると、日本から迎えに来た船が横たわっている。一船に二千人乗れるらしい。収容所内には三、四万いるらしい。それまでに、れんが作り、住宅を作る工場、流れ作業で作って組み立て、汽車に詰め込む仕事である。「ヤボンスキーダモイハラシヨ」。日本国に帰れるので嬉しいでしょう。現

地の方と仲良くなった頃、二日前に乗船する準備をする。持ち物の点検、紙切れに何か書いていないかな等々、いろんなことが検査されることになっていった。

昭和二十四年八月三日、いよいよ乗船する日である。その日は朝から晴天である。何か今日の日を祝っているように思えた。五人一組で一人一人をソ連の将校が氏名を名のり乗船する。「ハシジメタカシ」「ハイ」、橋爪隆司と名のり、タラップを登った。タラップが長い距離に感じられた。舷側岸壁の間は、見えないう国境がある。今その国境を越えるのかと思うと足が震えた。歩いてわずか一分、タラップを一步一步踏みしめて、赤く十字の色もくつきり、病院船高砂丸と書いてある。もう大丈夫なのだ。四年という長い年月シベリアの寒風に耐えたのだ、この細い体で。いつしか涙が止まらない。遠く見上げると、「あの島日本ですよ」「わあ、いいなあ」「素晴らしいなあ」日本海の風景を友と同じ甲板で、海鳴りの詩がランランと響いてくるので、口ずさみながら私たちは泣いた。

アメリカの有力誌、『コリヤンズ』の三十一年十月

号に「まぼろしの如く消えた、開拓者の末路」という題で満州の開拓団員数千人がいまだに消息不明で、生死が判明しないのは不思議な話である。生死不明ではない。

日本では消息不明者として取り扱われているのである。しかるにソ連政府は、一人の消息不明者もない、全部送還し、残るは戦犯二千人足らずであるが、これも平和交渉のいかんによっては直ちに帰国せしめると発表。また、この数と名簿は日本政府に手交し、大体の抑留者問題は片づいたと称しているのである。要するに、我々は現実にソ連各地のラーゲルや墓に代表を送り、実地に名簿と対照する以外に真実を知ることにはできないのである。余りにも多数で整理や理由がつかないためである。そして大虐殺をただ一つの国境における戦闘行為であって、多少死亡した者もあるが、これが不明で、戦争の一過程だから致し方がないとソ連側は苦しい答弁をしている。

しかし、それは関東軍相手の話であって、東満、北満地区にいた、無防備の開拓団に対しては一切通じな

いのである。天理教団を始め弥栄村、千振村、勃利開拓団、そして鏡泊湖畔の鏡泊学園、その他各地に散在した訓練所は、満州農業移民入植大系を見てもいかに広範囲にあったかがわかる。どんなにうそを言っても政府には蔽然たる完備した資料があるのだ。組織立った入移民団は第七次までに数万を算し、そのほかに自由移民の形で入満した人々、鏡泊学園の二百戸をはじめ松陰村、拉村等々二十四カ所に及んでいる。加うるに林業移民や煙草移民、さらに自警村もあった。特に開拓青年義勇隊訓練所は、孫吳、寧安、鉄嶺、勃利、対店等に設置され、極めて優秀な数千の青年が、第二の満州開拓の基礎人物たるべく集結せしめられていたのである。終戦と同時にソ連の進駐によっていかに悲惨な目を、恐ろしい大殺戮に遭遇したか、まだまだこの記憶は消えやらぬ一大哀史となり、遺族はもちろん、日本人の血を煮えくり返らせているのである。電信電話の不完備から敗戦を知らない山間僻地の開拓団員は、ソ連の侵入は何のためか全く寝耳に水の話で、あれよあれよという間に男性と名のつくものは捕

虜となり、女性は老人に至るまで満人家屋に押し込められ、鬼畜に等しい恥辱を加えられたのである。日本敗れたり、全面無条件降伏を知って初めて我に返った人々は、右に左の連絡を急速度になし遂げ、逃げる、南下せよ、安全地を探せ、関東軍の兵舎に向かえ、女子といえども生きている限りは身をもって、山中でもよい、川の中でもよい、身を守れ。こんな言葉が次から次へと伝えられ、北滿一帯は混乱になったのである。そのうちでも特に青年義勇隊員は訓練所のラジオで事情を知っているだけに、ソ連と一戦交戦しようという勇氣ある者どもが立ち上がったのであるが、大勢はすべて平和であろう新京、ハルピンを目指して南下する事に一決したのであった。ソ連軍は北は孫吳、虎林、綏芬河、図們地区の四方面から津波のごとくに戦車を先頭に侵入してきたのであった。

浮足立った関東軍はどんどん後退する一方で、それに付随して市民も一路南下したのであった。ソ連軍の戦車が本道を驍進して来るので、義勇隊は勢いを増加するために浜綏線に沿って数百人ずつが一団となって

数個分団にまとまりつつ南下し、ソ連軍に発見されぬように看視兵を出しつつ行動したが、ここに思わぬ手違いが生じ、第一回の大残虐事件が発生したのであった。

それは八月十九日の夕方であった。大部隊の看視兵がソ連軍に発見された。逃げ遅れた隊員は機関銃で蜂の巣のごとく射殺されたが、その銃声が後続部隊にとどろき渡ったので、一行は驚きと共に両側の山野に散開した。しかし血迷ったソ連軍は火炎放射砲を持ち出し、夕暮れの山野に向かって一斉射撃を行ったのであった。その後にはトラと称せられる重戦車が続いてきた。数千人の一団は四方から熱火を浴びせられ、道路にゴロゴロ転落し、半死半生で動きが取れない苦しみの叫びは山間にこだました。救いを求め降伏を訴えるキレギレの声もいつか消え、あたりは元の静寂に返ってしまった。それは十数台の重戦車がその半死半生の青年隊をベタバタと押しつぶして通過したからであった。

ああ、何という悲惨な出来事であろう。せんべいの

ようになった人間の薄べらな形が、黒土に赤じゅうたを敷いたように延々二キロの道をふさいだのであった。

一声もなく全く元の静かな満州の野辺に返っていたが、ここに数千人の人々が一瞬にして消滅してしまっただのである。火であぶられた人間を戦車での上イカのごとくに冷酷にひき去った。ソ連軍は次の獲物を求めて早々と立ち去っていたのである。その報告では生存者が僅かに五人と記されてあった。あまりに悲惨な、想像を絶する大虐殺が行われていたが、これら一切「消息不明」の四文字によってソ連では片づけているのである。横道河子の中で二十数人の人々と会った。その時の話で、ソ連との戦闘があり、命からがら山に入り野宿して来たとの話、三十一年にアメリカの有力誌「コリヤンズ」の十月号に、消えた青少年義勇隊の記事があるのを読みました。

野獣でもなく、魂も良心もなく、一つの鉄のロボットか。もし人の子であったら帰隊後あの惨事を思い浮かべ狂死したか、いずれにしても想像のつかない動物

であったと言えよう。

国策の名のもとに緞肩に日本海を渡った、まだ十六、七歳の若い人であろう。八月十日頃から十八日頃まで、死亡した人々はたくさんいるはずだ。消息不明となっているのだ。満州国土の土となり、あれから五十三年は流れた。彼らの前には一枝の花もないのである。私も、はや七十五歳の老齢である、記憶のあるうちに書き残しておこうと思ひ筆を取ったのである。

あとがき

私自身の、義勇隊、捕虜の十年間、歩んできた道は、ただ踏まれても踏まれても雑草のように立ち上がる、気力だけであり、雑草は強い意味で何らかのお役に立つならば、この上もない幸福なことであります。

なお、記載したものは、「全貌第四十六号」「消えた青年義勇隊」から抜粋しました。

最後に、義勇隊として青春のすべてを捧げ、不幸にも加護なく亡くなられた拓友に、心から御冥福をお祈りいたします。

朝露のたまゆらにして消ゆるごと

君はうつせし世を去り給ひたり

死に水も 凍りて飲めづ

捕虜ゆけり

## シベリア回顧録

富山県 窪谷好信

鮮烈な記憶をたどり

抑留中の強い印象をよみがえらせ、当時の心境を再現し、生涯最大苦難の経験を顧みる、ここに平和の尊さと戦争の愚かさを改めて世間の人たちに知ってもらいたいものである。

強制連行

武装解除に次いで敦化周辺の部隊は、沙河沿飛行場の原野に集結させられ難民化した将兵は天幕野営することとなる。何もすることなく唯一その日の食糧調達に畑荒らしに出掛けたり賭博にふけったり、あてど無い毎日を送る。やがてソ連は千人単位の大隊を編成し